



巻き込まれ召喚!? そして私は『神』でした?? 1

A L P H A L I G H T

まはふる
Mahapuru



Characters

【カレット】

剣士をしている冒険者。
「青狼のたてがみ」の
リーダー。

【ケンジャン】

タクミと一緒に召喚された
男性。職業は賢者。

【キャシー】

ラレントの村の仕事
斡旋所受付嬢。キャサ
リーの姉。

【フェリナ】

エルフの精霊使い。
「青狼のたてがみ」
の一員。

【エイキ】

タクミと一緒に召喚された
高校生。職業は勇者。

【キャサリー】

ラレントの村にある冒険者
ギルドの受付嬢。

【レーネ】

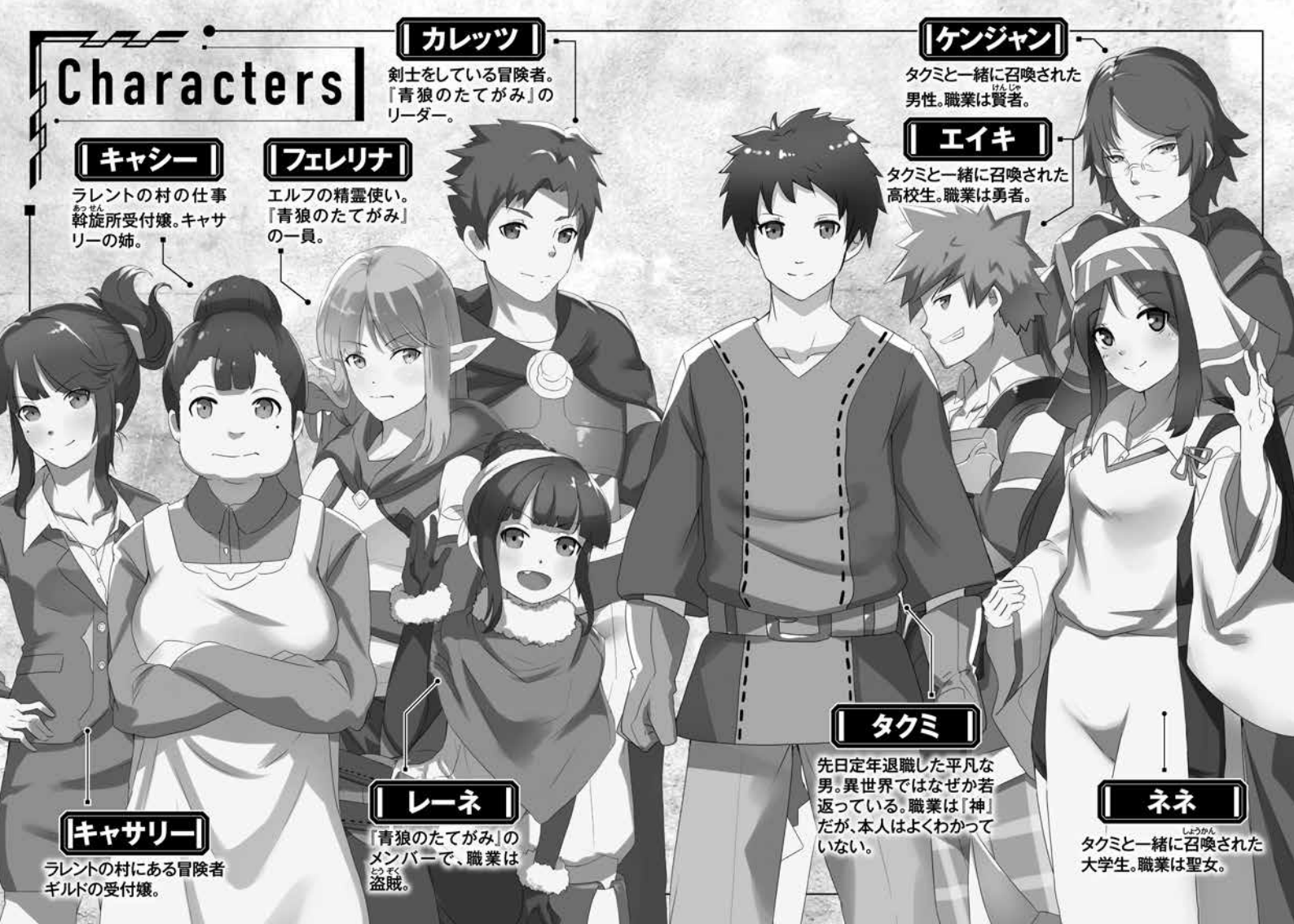
「青狼のたてがみ」の
メンバーで、職業は
盗賊。

【タクミ】

先日定年退職した平凡な
男。異世界ではなぜか若
返っている。職業は「神」
だが、本人はよくわかって
いない。

【ネネ】

タクミと一緒に召喚された
大学生。職業は聖女。



目次

第一章 異なる世界に召喚しょうかんされて 7

第二章 第二の人生は異世界生活 91

第三章 英雄を訪ねて 217

第一章 異なる世界に召喚されて

先日、六十歳を迎えまして、私——斉木拓未は職場を円満に定年退職しました。退職前は、これからの悠々自適な余生をどのように過ごそうか、楽しく思い描いていたのですが……

実際、自由の身になってみますと、別段趣味らしい趣味もなく、ルーチンワークで生きてきた私にとりまして、やりたいことなど二ヶ月を待たずして尽きてしまいました。この歳になりますと、新しいことに挑戦するのも、意外と勇気がいるものです。

伴侶もなければ当然子もなく、両親はどうに他界しまして、親類縁者もおりません。もともと人付き合いに前向きではなく、知人もすべて仕事関係ですので、平凡極まる日常は単なる日々の焼き増しのようでした。

だからこそ、どこか心の奥底で変化を望んでいたのかもしれないかもしれません。ただそれは、非日常を待望していたわけではないのですけれど。

近所のスーパーで今日の昼食用の買い物を買って済ませ、自宅に戻ったところでした。いつも通りにガレージに車を停め、いつも通りに玄関を開け、いつも通りに居間に入り、いつも通りにテレビでも点けようと思っていたのですが――

居間に入った時点で、どういうわけか私はお城の中にいました。

石造りの床や壁、高い天井、豪華な絨毯に絵画、頭上の明かり取りの窓からは陽光が差し込んでいます。

定年退職記念に一大決心しまして、フランスはパリへ旅行に行つたばかりなのですが、内装はあちらのベルサイユ宮殿を代表するバロック建築に似ていました。

もちろん、自宅の居間を中世欧州ふうりにリフォームした覚えはありません。

といいますか、明らかに自宅の居間より広い空間なのですから、意味不明です。

咄嗟に背後を確認しましたが、入ってきたはずの廊下と部屋を隔てる襖はすでに消えていました。

「よくぞ参られた！ 救国の英雄よ！」

諸手を挙げて嬉しそうに声を張り上げているのは、でっぷりと太ったメタボな白人さんです。もう更年期を迎えているでしょうに、自己管理ができていなそうです。

老後が心配ではないのでしょうか。私も最近はとみに気に掛けていますから、この方もなにかと持病が多いのではないかと、他人事ながら心配してしまいますね。

こちらのメタボな方は、煌びやかな衣装に多数の装飾品、真っ赤なマントに金の王冠と、内装に見合った異国の王様の風体をしています。

他にも白い外套を着た、私と同じくらいの初老の方や、老若入り乱れた大勢の西洋鎧姿の方々がいます。

なんといいですか、居合わせる方の全員が全員、いかにも中世ヨーロッパを舞台にしたオペラの登場人物のようですね。

その時代に当てはめると、この場合は王城の謁見の間とか、そういったところでしょうか。

赤絨毯の先にある壇上には玉座が据えられていて、壇下ではそんな異国の時代錯誤な格好の人たちが、なぜか私たちをぐるりと取り囲んでいるわけです。

ああ、ちなみに、たちというのは、この場にいるのは私だけじゃないからです。

私の他にも三人、男性ふたりと女性ひとりがいます。顔見知りではありませんでしたが、彼らは普通の格好でして、男性のひとりとは高級そうなジャケットを着てメガネをかけた青年で、インテリな印象があります。

もうひとりの男性は――男性というよりは男の子ですね。どこかの学校の制服でしよう、チェックのズボンにシャツを着崩した学生さんです。このくらいの子は中高区別つきにくいのですが、髪形がテレビで見かける芸能人ふうですので、高校生でしょうか。

女性のほうはスーツ姿で、学生にしては大人っぽく、社会人にしては初々しい。今時珍しい落ち着いた髪色で、定期的に就職活動中の女子大生という感じがしますね。

それに私を加えた四人が、この場にいる日本人です。皆も私と同じく、ここにいる意味がわかっていないようで、困惑されているのが取れます。

第一、メタボの人が語った、救国の英雄ってなんでしょうね？

「ざけんなっ！ てめーら、どこのどいつだよ!？」

「こんな拉致誘拐まがいのことをして、ただで済むと思っているのですか!？」

男の子と青年が猛抗議しています。ここは血気盛んな若手にお任せしましょう。

これは明らかに異常事態。私が持病を悪化させてぼっくり逝き、ここが実はあの世——というオチでなければの話ですが。

今は、少しでも情報が欲しいところです。

床に正座して成り行きを窺っていますと、同じく座っていたスーツの女性がおそるおそる四つん這いで近寄ってきました。見るからに青ざめています。

年齢的には孫に相当するうら若い女性だけに、無理ありません。

私とて、年長者として気を張っていないければ、我を忘れていたかもしれませんから。

「あの……すみません、なにが起こっているんでしょう？ あたし、就活で会社説明会の

待合室にいたはずなのに、気付いたらこんな場所に……」

どうも、状況は私と似たようなものみたいですね。

「私も自宅にいたはずなのですが、どういうわけかこのような始末でして。お力になれず申し訳ありません、お嬢ちゃん」

「お嬢ちゃん？」

「ああ、これは失敬。初対面の年頃の娘さんに、お嬢ちゃんはありませんね。なにぶん、孫でもおかしくない歳の差だったもので、つい。いえ、天涯孤独の身ですから、実際に孫がいるわけではないのですが」

彼女は大きな目をさらに大きく見開いたのち、ぶつと噴き出しました。

「ありがとうございます。あたし、霧崎寧々です。大学三年生です」

霧崎さんですね。

どうして、お礼を述べられたのかはわかりませんが。

「斉木拓未と申します。定年退職しまして、今は無職の身です」

「ぶつ。面白い方なんですネ、斉木さんって」

霧崎さんはまた噴き出して、

「そういう設定なんですか？ ふふ、おつかしい。あたしの気分をほぐそうとしてくれるんですよ？ 気を使ってもらっちゃったみたいで、ありがとうございます」

と、目尻の涙を拭っていました。

図らずも、元気づける結果になったのはよかったですか……私としましては、普通に
 応対していたつもりでした。なにか笑わせる要素でもあったのでしょうか？ 私も思わず
 愛想笑いをしたものの、内心では首を捻るばかりです。

これがジエネレーションギャップというやつですか。コミュニケーションひとつつて
 も、私には難易度が高すぎるようです。

そうやって少しは元気を取り戻してくれた霧崎さんなのですが、こんな状況下では長続
 きするわけもなく……すぐにまた不安に顔を曇らせてしまいました。

「あたしたち、どうなるんでしょうか……？」

「あ。それについては、今から説明があるみたいですよ」

先方の代表者——先ほどのメタボな方ですが、王様のような風体ではなく、本当に王
 様だったようです——が私たちの眼前に立ちまして、厳かに説明してくれました。

大仰な言い回しに回りくどい説明の上、聞き慣れない単語も多く、簡潔明瞭を旨とす
 る一般企業のプレゼンテーションでは突き返されそうな内容でしたが、贅沢は言えません。
 要約しますと——

一、ここはカレドサニア王国という異世界の国。

二、魔王という人類の宿敵が侵略しようとしている。

三、魔王打倒のために英雄招来の秘術を用い、この四人が召喚された。

と、こういうことらしいですね。

ただ、そもそも異世界というものがよくわかりません。異国とは違うのでしょうか……？

『魔王』といえばゲーテの詩が有名ですが、どうやら特定の人物を指しているようです。
 戦国武将の織田信長が自称した『第六天魔王』や、キリスト教におけるサタンのような
 概念でしょうか。説明の解説がほしいところです。

私と違い、隣の霧崎さんはその説明だけで理解されたようですので、こっそり訊いてみ
 ましたが……

「芥木さんは、ゲームやラノベは……？」

そう訊き返されてしまいました。

ゲームといえますと、霧崎さんの年代からしましてテレビゲームのことでしょう。ただ、
 ラノベ——こちらはリノベーションの略、というわけでもなさそうです……

霧崎さんの口ぶりから察しますに、常識の範疇のようですから、聞くは一時の恥、聞か
 ぬは一生の恥ということで、私は素直に何うことにしました。

「不勉強で申し訳ありません。近頃の若者の情勢にはとんと疎く……よろしければ、簡単に教えていただけるとありがたいのですが」

そうやって手短かに教えてもらった内容をもとに、私は自分なりに解釈してみました。

（どうやら私たちは、戦時中の異国で兵士にされるために神隠しに遭った、ということですね……）

大筋では間違っていないでしょう。

私たちの親世代より伝え聞く、先の大戦中の徴兵制度のようなものですね。

ただし明確な相違としましては、ここが日本ではなく、私たちがそんな義務を負う謂れはないことです。

相手の同意もなしに拉致まがいの一方向的に連れてきて、挙句にこの国のために命がけで戦えなどは、常軌を逸しています。

前途ある若者たちを、そんな危険に晒すわけにはいきません！

当然、私自身も断固お断りです！

ここは年長者の私が、確固たる意志をもって否定の意を示そうとしたのですが……

先ほどの剣幕でしたから、私以上に若手の男性ふたりもどれだけ反発するかと思っていたのです。ところが、どういうわけか意外に満更でもなさそうでした。

高校生の子など、すでにやる気満々になっているような……今時の若い者の感性には、

とてもついていけません。

戦争ですよ？ わかっているのでしょうか……？

彼らふたりが同意してしまったことで、なし崩し的に霧崎さんも引き込まれてしまいました。

こうなってしまうと、私だけ反対するわけにもいきません。

つい先刻までは見ず知らずの間柄でしたが、年長者の責任としまして、彼らを守る義務があります。

……しかしながら、ここは日本の法律が及ばない異国の地。

大人しくしている今は、相手も慇懃な態度ですが、下手に逆らうことでいつ暴挙に出ないとも限りません。

それに、私たちを連れてきたのが彼らなら、戻る手段を有するのもまた彼らをおいて他にいないでしょう。

結局のところ、主導権がこちら側にあることは否めません。

これから私たちは、適性検査を受けることになりました。

よくわかりませんが、検査といいますが、魔法でステータスなるものを確認するだけだそうです。

なんでも、それにより個人の技能や身体特性を調べることができるそうでした。

白い外套がいのうの人は、宮廷魔術師という魔法の権威けんいらしく、その方にステータスを見るための魔法のやり方を簡単に教わりました。

魔法と聞きますと、夢物語やフィクションとしか思えないのですが、ここでは呪文まじないなる祝詞のりことのような文言を唱なえることで誰でも使えるそうです。

どういう仕組みなのでしょう？

まあ、日本でも最近の科学技術は発展していきまして、常日頃から理屈つづなど露つゆほども知らずに使っているものもざらですから、今さらでしょうが。

それを考慮しこうりょしますと、最新技術も魔法も似たようなものかもしれませんね。

「ステータス、オープン」

慣れない言葉を口にするのは、なんだか気恥きはずかしいものです。

呪文はなぜか和製英語でした。

こちらの方々は、見た目は外国人っぽいですが日本語で喋しゃべっていますので、今さら不思議には思いませんが、どうやらそういうものらしいですね。

「あつ、本当に出ましたね」

目の前に、A4サイズほどの半透明はんとうめいな窓が浮かび上がりました。

触さわろうとするとすり抜けてしまい、しかも本人にしか見ええないというのは、まるで魔法のようです。ではなく、本物の魔法でしたっけ。

「やった！俺、勇者じゃん！」

どよめきの中、高校生の子がガッツポーズをして飛び跳はねていました。

よくわかりませんが、勇者というからには、勇敢ゆうかんなる者ものなのでしょう？

勇気は確かに素晴らしいですが、ただそれだけではないような雰囲気かみきです。

きつと、すごいものなのでしょう。

「賢者けんじやだな」

またもや、周囲がどよめました。

ジャケットの青年は、高校生と違って涼すずしげに言っていました。どこか誇ほこらしげです。

賢者がすごいものだと、私にも言葉のニュアンスからわかります。

「あ、あの……聖女、です」

場が三度、どよめます。それどころか、熱狂ねつきやうすら感じられるほどです。

霧崎さんの恐縮おそそくっぷりが、ちよつとかわいそうなくらいです。

聖女というのがどれくらいすごいのか、この反応だけでもわかるというものです。

といいますか、私ってさつきから、すごいすごいばかり言っていますね。

でも、仕方ないじゃないですか、よくわからないのですから。

「して、そなたはどうなのだ？」

メタボな王様と、目をぎらつかせた宮廷魔術師さんが、興奮こっぴして今度は私に詰め寄よって

きました。

あの、近いんですが。離れてもらえますか？

いわゆる大当たり三連発ということだったのでしょうか。

私に期待するのはわからないでもありません……ただ、二度あることは三度ある、とはよく聞きますが、四度目も都合よくいくとはあまり聞きません。

むしろ、私の顔も三度まで——いえ、これでしたら意味合いが違いますね。

これはあの、バラエティ番組でありがちな、オチが付く、というやつではないでしょうか？

こう、ちゃんちゃん♪ といった音が鳴る感じの。

昨晚、たまたま何気なく見ていたテレビ番組がそうだったものでした……

老い先短い老体に、過度の期待はやめてほしいものです。

事前に受けた説明によりますと、確認すべきはステータスの職業欄とやらであったはずです。

どれどれ……

他にも、HPやらMPやら意味不明な略記号が並んでいますが、職業は……あ、これでしょうか。

ステータスの職業と銘打たれた箇所に記載されていたのは、たった一文字でした。

『神』

んん？ ……神？

それって少なくとも職業じゃないですよね？ なにかの間違いでしょうか？

先ほどの勇者も賢者も職業っぽくはなかったですが、個人を指す言葉でした。対しまして、こちらはあまりに抽象的すぎませんか。

普通でしたら、たとえば神に仕える職業ならばそのあとにまだ文字が続くと思うのですが……日本では『主』なり『職』なり、外国では『官』なり『父』なりといったところですよね。

「どうした、そなた。答えぬか！」

悩みどころです。そのまま答えていいものでしょうか。

特に宗教絡みは、非常にデリケートな問題をばらむ場合が多々あります。

第一、職業が神などと、荒唐無稽で意味不明もいとこです。

「神……官？ ……ででしょうか？」

とりあえず答えたのですが、傍目でわかるくらいにがっかりされました。

「ただの神官……珍しくもない。いや！ なにか素晴らしいスキルをいくつも持っているのではないか!？」

これもよくわかりませんが、ステータスの下のほうにあるスキル欄……これでしょうか。

スキルと聞きますと、仕事に必須の対人スキルや交渉スキルを思いつきますが、こちら
もまたこの世界では職業と同じく、意味合いが少し異なりそうですね。

スキル欄にあったのは、「万物創生」ただひとつ。なにか、大層な名前ではあるのです
が……

「ひとつだけですな」

「うぬぬ、たったひとつか……きょうび、幼子でも三つや四つは持っているぞ？」
そう言われましたも。

「まだだ！ では、レベルの数値は!? もしや、とてつもない強さを——」

なにやら、おふたりとも必死ですね。

こちらまで、少々焦ってきてしまいますよ。

レベル、レベル……ああ、これでしょうか。

そこに記載されていた数字は——

「すみません。1です」

私はいったいなにに謝っているのでしょうか？

「聞けい、皆の者！ 今日この場に、三人の偉大な英雄が現われた！ これは人類に、魔
王をくだし、勝利を収めよとの神の啓示であろう！」

「うおおー！！」

この場に居合わせる者たちが武器を掲げ、石畳を踵で何度も踏み鳴らしています。
……どうやら、私のことはなかったことにされたっぽいですね。

「この英雄たちにより、明日に迫る魔王軍の大侵攻にも、打ち勝てるであろう！」

「うおおー！！」

え？ 明日の大侵攻？ なんですか、それ。

熱狂のさなか、手近な兵隊さんをつかまえてみました。

「なんだ、ハズレの奴か。今、盛り上がってんだよ、邪魔すんな」

いえあの、ハズレって。年長者を敬えとまではいいませんが、せめて言葉を選んでもら
えるとありがたいのですが。

まあ、それはこの際、置いておきましょう。

「大侵攻ってなんですか？ 敵が攻めてくるんですか？」

「そうだよ。なんせ、魔王軍はこちらの十倍以上の軍勢って話だ。正直、俺も他の奴らを
見做って逃げ出したかったが、そうしないでよかったぜ。敵前逃亡は死罪だからな」

大軍が攻めてくる……？

おや？ 先ほどの話の流れでいいいますと……

「十倍？ もしや、私たちがその十倍いる魔王軍とやらと戦うんですか？」

「あたりめーだろ。そのために、こんな大々的な儀式したんだしな。おめでたいお偉方も、

ここまで追い詰められて、さすがに樂觀視できなくなったみてーだな。おっと、こいつは内緒だぜ？ はっはっ！」

「侵攻は明日で？」

「明日だよ」

「明日、私たちが戦うと？」

「だからそうだって言っただろう？ しつけないか？」

兵隊さんは怪訝な顔をしながら、歓喜に沸く輪の中に戻っていきましました。

どうやら本当に、私たち四人は明日、十倍というその魔王軍と戦わないといけないみたいです。

私をはじめ、実戦経験はゼロと思われるこの四人で。

いくらなんでも、それはあまりに無計画すぎではないでしょうか……



私たち四人は、城内の別室に移されました。

移動時に、廊下から外の様子が見られたのですが、やはりここは日本ではありませんでした。

この城は丘の上に建てられておりまして、麓には町があり、その周囲を高い壁が囲んでいます。

城が小高い位置にあるため、周囲の景色が地平まで見渡せるほどです。

城壁の外は、まさに壮大な大自然でした。広大な平原がどこまでも続き、大河が横切り、鬱蒼とした森が広がりまして、遠くには白く輝く山脈が連なっています。

人の手が加えられていない自然は、欧州旅行の際に見たどこの風景よりも美しく、雄大でした。

これを目の当たりにして、初めて異世界を実感しました。

ここは国などという些細な違いではなく、世界そのものが違います。そんな説得力がありました。

年甲斐もなく、自然美に感動していたのですが、若い人はそうでもないようです。

皆に置いていかれそうになったので、同行する兵隊さんに後ろから槍の柄で小突かれました。

案内されたのは貴賓室で、格調高い家具と豪華な調度品が飾られた部屋でした。

テーブルには軽めの飲食物が用意されており、案内してくれた女中さんの話では、ここですばい待機したあとに、あらためて個別の部屋に案内されるそうです。

その女中さんも礼儀正しくお辞儀したあとに退室していきまして、部屋には私たち四人

だけが取り残されました。

扉の外には、同行してきた兵隊さんたちが待機しているのですが、こうして四人が落ち着いた状況で話し合えるのは、こちらに来てから初めてのことです。

他の三名の様子はといいますと――

「あー、リアルメイドって初めて見た！ カフェとかよりも、本物はちよつと地味めなのな！」

高校生の子はリラックスした感じで、さっそくソファーに横になり、テーブルのお菓子かしを齧かじっています。

「ちつ……やはりスマホは使えないか……」

ジャケットの男性は部屋の隅で携帯電話を弄いじりながら、ぶつぶつ呟つぶやいています。

霧崎さんは、すでに自己紹介を済ませた私に寄り添そうように立っています。

せっかく得た機会ですし、この時間を有効活用しまして、話し合う必要があるでしょう。

それに、先ほど聞いた明日の魔王軍の大侵攻とやらも、伝えておかないといけませんし。

「皆さん、こうしてお会いしたのも、なにかの縁えん。よろしければ、自己紹介をしませんか？」

私はできる限り友好的に切り出してみました。

最近の若い方は、内向気味きまであると聞き及んでいます。こうしたことも、年長者の役目

でしょう。

「ああ、巻き込まれ召喚のアンちゃん！ だつせ、ウケる！ ははははは」

巻き込まれ召喚？

なんでしよう、初めて耳にする言葉です。悪気わるきはないようですが、小馬鹿にされた感はありませんね。

少年はソファーで足をばたばたさせています。

最近の子が内向的という情報は、間違いだっただけでしょうか。

「キミ！ 目上の人に対して、そんな言い方はないんじゃない!？」

哑然あざとする私に代わって食ってかかったのは、霧崎さんでした。

「目上って、神官でレベル1なのに？ 俺、勇者だし、目上っていうと俺のほうじゃねー?」

ソファーで寝転がってなおも大笑いする少年に、霧崎さんが詰め寄りますと――少年がぴたりと笑いをやめまして、ソファーから起き上がりました。

「あー、わりわり。マジになんないですよ。俺ってケーハクなんで、こんな感じだけどさ。

別にアンタの彼氏かみを貶なげしたつもりはねーんだよね。カンベンしてよ、聖女のねーちゃん」

「つ、付き合ってるわけじゃありません！」

霧崎さんは、顔を赤くして叫さけびました。



そりゃあ、こんなお祖父ちゃんじいと孫まごのような歳の差で、恋人めづか扱いされたら怒りますよね。
はは。

「そなの？ どっちでもいいけどさ。イケメンのアンちゃんもカンベンな」

笑いながら、私は背中をバンバン叩たたかれました。

「なんといいますか、とてもフレンドリーな子ですね。学生さんしてみれば、こんなお爺ちゃんじいといってもいい私に。」

イケメンとか、アンちゃんとか、言われたのも初めてですよ。

「自己紹介だっけ？ んじゃ、ワジも兼ねて俺かからな。田中詠希たなかえいぎね。高二の十六。ついさつきから勇者やってます、なんて。田中は平凡すぎて嫌いなので、エイキって呼んでな」

「ははっ、詠希君ですね？」

「君とかいんねーから。カタカナふうふうにエイキで」
カタカナふうふうって。

面白い子ですね。詠希君——いえ、エイキでしたか。他人を下の名前で呼び捨てなど、これまでほとんどしたことないのですが、本人が望むのでしたら尊重そんじょうしましょう。

「じゃあ次な。俺の次はそのメガネ賢者けんね」

「誰がメガネ賢者だ!? そもそもその流れで、なんで僕に振る!?」

ジャケットの青年が驚いていました。

私も今の流れでは、次は自分の番かと思っていたところですよ。

突拍子もないところは、若さゆえでしょうか。本当に楽しい子ですね。

「にもし。興味なさそうならふりしてたけど、やっぱ聞いてた。駄目ですよ、男で誘われ待ちとか？」

「誰がだ、このガキ！ だから、ガキは嫌いなんだよ……ちつ、まあいい。鷹内顕司だ。二十三歳。個人投資家をやっている」

「賢者で顕司とか、ダブってウケる」

「ほっとけ！」

「じゃあ皆、このメガネくんはケンちゃん、よろしく」

「なんで最年長の僕がちゃん付けなんだ!？」

「えー？ 普通、ファンタジーものなら名前呼びでしょ？」

「う、それには同意しないでもないが……でも、ちゃんはないだろう！」

「だって、賢者だよ？ 勇者エイキみたいに、ケンジャケンジとか呼ばれると、ややこしくね？」

「賢者ケンちゃんはどう違う!？」

「あーもう、わがままだなあ。じゃあ、ケンジャンで決定ということで」

「混ぜるな！」

ふたりはなおもぎゃあぎゃあと言いつ争っていましたが、最終的にはエイキが押し切りまして、あだ名は、ケンジャンで決定したようです。

ただ、ケンジャンが諦めたというかたちでしたが、仲良きことはいいことですね。

疲れ果ててソファに蹲るケンジャンと、テーブルの上で勝ち名乗りを上げるエイキを見まして、霧崎さんは若干苦笑していました。

「えー、では次。あたしということ……すごく自己紹介しにくい空気だけど。霧崎寧々です。大学三年の二十一歳です」

「聖女ネちゃん？」

「この流れで名前呼びなのは諦めたけど、ちゃん はやめてね。あと、聖女も。お願いだから」

「んじゃ、ネネさんね」

おや。今度はエイキはあっさり引きましたね。

「ネネちゃんって言いにくいから、間違つてネーちゃんって呼んじやいそーだし。ウチ、ひとつ上の姉貴がいてさ。昔、うっかりダチの前で、ねーちゃん、って大声で呼んで、甘えっ子ってかわれたのがすっごい恥ずくてさ。トラウマなんだよねー」

なるほど。微笑ましいトラウマですね。

そんな些細なことを恥ずかしいと気にするあたりは年相応というべきでしょうか。
 「……えっと、タクミさんもネネって呼んでくださいね。そういう空気みたいですから！
 ええ、他意はなく！」

「わかりました、ネネさん」

「……さん〴〵はいらないですよ？」

「それはちよっとご容赦ください。ははは」

さすがに、年頃の女性を名前で呼び捨ててというのは抵抗があります。
 年甲斐もなく照れてしまうのではないですか。

「えー、では最後になってしまつて恐縮ではありますが、私は斉木拓未と申します。六十歳、先日、定年を迎えまして今は無職です。よろしくお願いしますね」

私は頭を下げました。

「あははっ、やだなータクミさん。その設定、まだ引きずつてたんですか？ どう見ても、あたしと同じくらいですよね？」

「アンちゃん、つまらないって。そんな若作りの爺さん、いないっての」

「そうだな。六十歳のエルフです、とでも言ったほうが、まだウケが取れたものを」

「うっわー……ケンジャン、そりゃないわー。絶望的につまんねー」

「なんだと!？」

エイキとケンジャン、おふたりのじゃれ合いは置いておくとして。

設定？ 若作り？ どういうことでしょうか？

設定とは、ネネさんは謁見の間でも言われていましたね。

先ほどから皆さんの言動の端々に、違和感を覚えていたのですが……

考え込むときの癖で、顎のラインを指でなぞつたとき——決定的な違和感がありました。

咄嗟に、自分の指を見ますと、そこにあるのは長年見慣れてきたものではありませんでした。

顎を触り直してみますが、それもまた違和感しかありません。

私の手は、肌は——いつからこんな皺ひとつなく若々しくなつてしまったのでしょうか。
 室内を見回しますと、暖炉の上に大きめの鏡が据えられていました。

私は慌てふためき、そこまで走ります。

走つてみまして、あまりの身軽さと躍動感に驚きました。

そういえば、もはや慣れ親しんでいた倦怠感を覚えなくなつていたのは、いつからでしょうか。

「持病だった腰痛は。膝のリウマチは。五十肩は。」

覆い被さるように、両手を壁について向かい合った鏡に映し出されていたのは——

どう見ても、私の顔ではありませんでした。

ほぼ白髪で覆われ灰色っぽくなっていた頭髮は、黒く艶やかに変わっていきまして、顔中に深く刻まれていたはずの皺は、すべてなくなってしまうています。

そこにいるのは——精悍そうな青年でした。

今朝、起床して洗面台で顔を洗ったときには、いつも通りだったはずですが。

それがどうして別人の——

いえ、これは……

よくよく見ますと、この顔にはどこか見覚えがあります。

写真を残す習慣がなかったので、実に久しぶり——それこそ、四十年ぶりにお目にかかったのですが。

確かに、二十歳くらい私の顔でした。

どうやら私は、神隠しに遭ったばかりか、若返ってしまったようです。

「どうしたの、タクミさん？」

ネネさんの言葉に、私は我に返りました。

突拍子もない行動で、心配をかけてしまったようですね。

「これは失敬。皆さん、お騒がせしまして、申し訳ありません」

どうやら、この四人の中で容姿が変わってしまったのは、私だけのようです。

他のお三方からは、そういった気配が窺えませんが。

これはもしや、先ほどのステータスで見た『神』という職業が関係しているのでしょうか。

ですが、異界だか異世界だかのこの混乱した状況下で、さらなる疑問を投じるのは下策というものでしょう。

今のところ、実害があるわけではないようですので、まだ黙っていたほうがいいでしょうね。

余計な混乱を避けるためにも、見た目の年相応の振る舞いに徹しないと。

「でも、アンちゃんが六十歳つっても、案外ポイかも。なんか妙に口調が丁寧ってか、古臭い感じするし」

鋭いですね、エイキ。

「言われてみると確かに。物腰がじじ臭いしな」

ケンジャンまで同意して……

おふたりとも、さっきまで喧嘩されてませんでしたか？　こんなときだけ意気投合するのはどういうわけです？

「あたしも少しだけ……あ！　あくまでいい意味でだからね、タクミさん！　田舎のおじーちゃんと話してみたいで、あたしは好きってだけで！　あたし、おじーちゃん子

だったから！」

ああ、ネネさんまで。

「ネネちゃん、それってフォロウできてないから」

「ええ、嘘!? つて、ネネちゃんってなに!? あたしにはさん付けするんじゃないの?」

「しつくりこないからやめた」

「キミ、自由すぎだよ……」

これは言動を意識する必要があるそうですね。

中身は老体なのですが、老人らしくするなどは難儀なものですね。

もうちよっとフランクに喋るといいのでしょうか?」

付け焼き刃では、すぐにボロが出てしまいそうです……

いつの間にか、ネネさんも敬語が取れてしまったようですし、若い世代とはこんな感じなのでしょう。

見た目が同世代っぽいという、ネネさんの言葉にできるだけ倣ってみるとしますか。

「冗談はこのくらいにしといてさ、ちよっと話し合ってみないかい?」

「……アンちゃん、顔赤いけど」

そこは指摘しないでくださいね、エイキ。

慣れない喋り方は恥ずかしいんですよ、実際。

やっぱり、無理はするなということですね。

やめておきましょう。人間、自然が一番ですよね。

「さつきお城の兵隊さんに聞いたのですが……皆さん、心を静め、落ち着いて聞いてくださいね。なんと明日、魔王軍とやらが攻めてくるそうです。彼らはそこで、私たちを戦わせようとしています……これは危機的状況ですよ」

「へっ！ さっそくのバトルイベントかよ、燃える!」

「ふっ、この大賢者の実力を示してくれよう……まさか、ゲームではなく、本物の魔法が使える日がくるとはな、楽しみだ」

……おや? 想定していた反応と違うのですが。

「相手の軍勢は、こちらの十倍もの大軍らしいのですが」

「十倍! いいね、いいね。大規模バトル!」

「ほほう? ここは我が戦略級大魔法の出番のようだな」

エイキがはしゃぐ一方で、ケンジャンは私以上に言動がおかしくなっていませんか?

我が、ってなんです?」

「はっ! もしや、おふたりには戦闘経験が……?」

「昔、少しヤンチャしてたくらい?」

「ないな。運動は苦手だ」

ああ、なんて根拠しんきょのない自信なのでしよう。

近代兵器のない戦争は数の勝負。複数人に前後から挟はさまれただけでも、並の人では簡単に負けてしまうというのに、それが武器を持った十倍の数ですよ？

こちらが千人いたとしまして、私たちを加えても千四人対一万人。どう考えても勝てるわけではないでしょう。

「タクミさん、あたしどうしよう……？ 勝てるわけないよ、そんなの……」

「ネネさんが私の服の裾すそを掴つかんで震えています。

そう、こちらのほうが当然の反応なのですよね。

「なに、ビビッてんの？ ネネちゃん、大丈夫だって！」

「エイキはどこまでもポジティブです。

しかしこれは、単なる樂觀らっかんの類たぐいでしょう。

安易あやひな思考は身を滅めぼします。褒められたものではありません。

「なんだよ、アンちゃんまで渋い顔しぶしちゃってさー。まあいいや、だったら見せてやるから。この勇者の力をさー」

エイキは私とネネさんの間に割り込み、それぞれの腕を取りました。

「ステータス、オープン！」

エイキが叫さけんだことにより、魔法で彼のステータスが空中に現われます。

通常と違うのは、彼のステータスなのに、私にも見えているところだ。

「驚いた？ さっき、魔術師のおっさんに聞いたんだけど、ステータスって相手に触つてると見えるらしいんだよねー。ほら、見てよ。俺のステータス」

レベル 42

HP 3200

MP 1930

ATK 780

DEF 694

INT 428

AGL 596

職業 勇者

「へへん、どう？」

「あの一、このHPやATKというのは……？」

「うわ、マジ？ そっから？ アンちゃん、どこの蛮族出よ？」

そう言いつつも、エイキは丁寧べんていに教えてくれました。

HPは体力、MPは魔力、ATKは攻撃力、DEFは防御力、INTは賢さ、AGLは素早さの英語の略で、ゲーム用語らしいです。

若者には一般常識らしく、ネネさんも知っていました。

つまり、彼らにとってここでの出来事は、現実にもかわらず、まさしくゲーム感覚なのでしよう。

「でさ、ここでの平均レベルって、一般兵でも20くらいで、パラメータの平均値は100以下なんだってさ。相手の魔物だとせいぜい70以下。ね？ これだったら、十倍くらいの数相手でも余裕でしょ？」

うーん。そんな安易なものなのでしょうか？

数値が十倍なら十倍の数に対応できる、という単純なものでもないような気がします……

「ついでだから、ネネちゃんのステータスも見せてよ！」

「え、あたしのも？ じゃあ……」

レベル51

HP 2023

MP 5230

ATK 130

DEF 261

INT 830

AGL 356

職業 聖女

「うっわ、レベル高っ！ でも、全体的にパラメータ低めなのは、スキルで補うタイプなかなー？ ほら、ケンジャンもポッチしてないで見せてよ」

「ふふん？ そうか、どうしても見たいなら仕方ないな……」

「出たよ、誘われ待ち。うっさ」

「なんだと！」

「あー、冗談冗談。ごめんて」

「……ちっ。寛大な僕に感謝しろよ。見ろ」

なんだかんだで、結局は見せるんですね。

……見てもらいたかったんですね、ケンジャン。

レベル40

HP 1502
MP 8900
ATK 89
DEF 112
INT 980
AGL 279

職業 賢者

「ケンジャンさんは、見事に魔法特化型なんですね……」

「叡智を極めし賢者だからな、僕は」

「でもさ、レベル一番低いし、女に身体パラメータ負けてるってのもどーよ？」

「うるさい！ 賢者だからいいんだよ！」

「やっぱ勇者が一番だね。主役だし」

「勇者が主役だと誰が決めた!？」

「ちょ、ふたりとも、やめてよ！ くつついてる状態で暴れないで！」

皆さん、仲いいですね。

私はずっと置いてけぼりですよ。全然ついていけません。

「あの……」

私は手を挙げてみました。

「私もステータス、ですか。見てもらってもいいでしょうか？」

この際です。こうして実際に見せ合えるのでしたら、私よりもその道に詳しい人たちに判断を仰ぐのが正解かもしれません。

専門知識のない私では、どうせひとりで悩んでいても、答えなど出ないのですから。

申し出たのですが、三者三様に反応は微妙でした。

「うーん、でもアンちゃん。レベル1だよねえ。今さらそんなの见ても、シラけるっていうか……ねえ？」

「僕も興味はないな」

「あの、あたしも自慢するみたいで気が引けるといいうか……ごめんなさいっ！」

ネネさんにいたっては、謝られてしまいました。

無理強いできることでもありませんし、仕方ありませんね。

—— こんこんっ。

「失礼いたします」

私たちのいる貴賓室のドアがノックされました。

どうやら、時間となってしまったようです。

立ち読みサンプル はここまで